新左翼

1969年
7月25日
第35号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

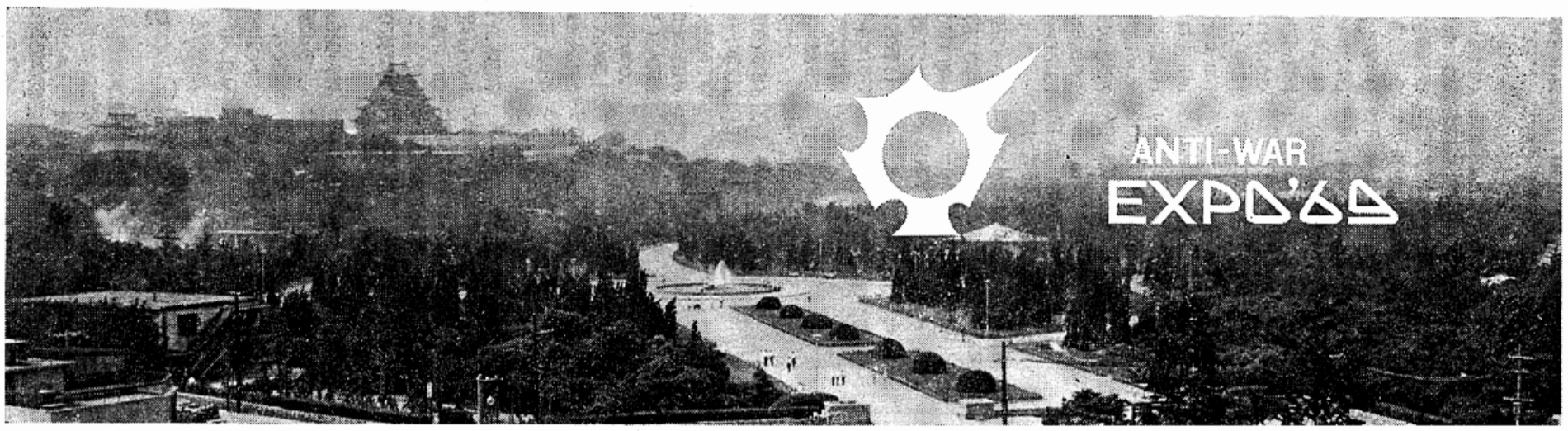
発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川端町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

記事紹介

二面
淡路島国際空港反対集会で、戸村一作氏が講演

三面
月へ逃げ出した米帝——アポロが示す敗北と退廃の「科学」

四面
南アフリカの武装闘争——モザンビーク解放戦線



あなたも主催者です
ハンパクへ集まろう

一九七〇年、千里丘陵、二兆円、日本万国博、EXPO、70、あと二××日、あと二××日、月の石の展示……もうすぐです。「人類の進歩と調和」というケッコウなテーマをぶらさげて、エキスポ70は、現実の矛盾を全て隠したまま、アンポ70の年にやってきます。

バンパクは、来年です。千里丘陵に「進歩と調和」の虚像を樹てます。これは、おそらく、ほぼ間違いなく開かれます。

ところが、一九六九年八月七日、大阪は森の宮の大阪城公園に、もう一つの万国博が開かれようとしています。政府が主催するのではなく、人民の全てが主催するです。ホンモノの万国博です。現実の上に立ち、そこを見つめ、それ故にこそ、アンポをぶちこわす運動を行ない、沖縄を私たちの手に取り戻すための運動を行なっている、そんな人民の戦いの場、解放の場、「平和と解放の実像」を打ち樹てようとする場です。だから、ホンモノです。

八月七日、早朝の大阪にマーラーの交響曲が聞こえます。通勤客の足を止めるほどのボリュームでビートルズの「レボリューション9」が、高倉健の「網走番外地」が、そして、おなじみのフォークソング、プロテストソングが、大阪城公園の森の中からきこえてくるのです。

ゲートをくぐると、中央に、シンボル・タワー。高さは、一〇・二一㍍。六・二五㍍のところには山崎君の写真。

あちこちに張りめぐらされた大小さまざまのテント。日中友好協会（正統）館では、中国物産展、九全大会を伝える映画、プロレタリア文化大革命を語る講釈師、その他さまざまな写真・絵。キューバ館では、キューバ革命と現代のキューバを踊る写真、絵、映画、その他。北海道の札幌べ平連が作った反戦ざんごう。南大阪べ平連子供の遊びと文化。創造的な遊びを忘れた子供に遊びを教えようという企画。毒性ガス。基地の実態を生々しく伝える沖縄館、等々。

疲れた人は、憩いの広場へ。米帝コーラは何と一五〇円。食事は「大村収容所定食」「網走番外地定食」その他「べ平連」というマカ不思議な食べ物もあります。また、札幌から運ばれてきたジャガイモ、トウモロコシが、空腹を刺激します。

腹ごしらえのできたところで、大テント（五〇〇人収容）へ。討論会、ハンパク市民大学が開かれています。「学生運動各派討論会」「闘うとは何か」これには、北小路破、戸村一作、小中陽太郎などの現に闘っている人々が参加。「五大政党討論会」佐藤栄作氏にも招待状を出しました。「大学問題討論会」、全共闘（長宮哲）教員（藤沢道郎、安藤紀興、高橋武智）大学職員（佐野章二）、労働組合員他の参加。

ハンパク市民大学は、「科学と戦争」「現代の標準」「思想と行動」「文学と情念」「歴史の現実」などのテーマで、毎日うだるようなあつさのなかで、井上清、亜紀五郎、高橋和巳、小田実などという第一線で奮闘しているインテリたちが熱弁をふるいます。聞く人たちからあつさなど忘れさせてしまうでしょう。

夕方四時、突如として、けたたましいオートバイのうなり声。疾走するヒロイン、そして、これまた疾走しようとする観客。観客は観客の座に安住できない。もちろん、演じる者もそこに安住できない。そんな大熱気の空間が、十万城をバックに、はたまた、機動隊をバックにくりひろげられるわけです。そろそろ映画上映の準備を開始しようとしていた「映画人」の中にも「演劇人」（現在芝居をしている人、というだけの意味で）が、遠慮会釈なく、土足で入ってきます。またハンパク実行委と銘打った小屋で、舞台装置造グループの「白雪姫」、反戦人形劇人会議の人形劇、その他、アラバールの「戦場のピクニック」、創作「愛（ラブ）あるいは反戦」、詩の朗読、シンポジウム……。

さあ、映写可能の時間になりました。野外に張られたスクリーンに、「網走番外地」「戦艦ポチョムキン」「ベトナム戦争（キューバ製作）」その他、六十数本の映画がオールナイトで上映されます。ひょっとした、雨が降ったら……、その時は、傘をさせばいいそれだけです。

（三面へつづく）

▽プログラム△

（詩）

7～11 詩をパネルに書いて並べる。各所で詩の朗読。

10 午後5～8時 シンポジウム"詩としての反戦、民衆とは何か"
詩劇 パントマイム

（音楽）

8 前10～後5 高校生フォークタウン 高石友也、中川五郎、岡林信康、高田渡、ほか全国から無数の個人やグループが参加

"後5～8・30 反博フォークイン・ナイト 関西フォークキャラバン、九州フォークゲリラ、東京フォーゲリラ、アブルズ、五つの赤い風船、加藤登紀子、西尾志真子、ジャックス、阪大ブロイントコール、阪大ニグロ

9 後7～ 反博ダウト・ビートビート、ジャズ・エレキ寺

10 前6 クラシックレコードコンサート
各所にジュークボックス

（美術）

7 月おくれ七夕 闘争決意をたんざくにかき、七夕の笹にぶら下げて、「反戦大明神」の祭りを行う

7 一～八月までの新聞のスクラップを、事件の関係のある場所にはって、世界地図を作る

10 朝から写生会

11 朝からデモのプラカード作り調賀会

特設ギャラリーでは、たくさんのパネル、風船、タイヤを用意し会場にきた人に作ってもらう

（演劇）

7～11 後4～ 芝居小屋ハンパク座
舞台装置創造グループ＝白雪姫
反戦人形劇人会議
その他プロ劇団、アマ劇団、学生劇団、職場劇団など参加 自由劇場の佐藤信氏が演出

（写真）

弾圧、公害の写真を全国から集める。とくに私服刑事の指名手配写真を全国からあつめている。

7～11 毎日毎時写真ニュースを発行

（映画）

7～10 後8～ 自主上映作品五社からしめだされた作品など五十本が、四つの野外スタジオで上映される。キューバ政府で製作したベトナム解放戦争ドキュメント映画が参加。

（反博市民大学）

7～11 後5～9・30

7 「科学技術の本来の姿」山田慶児「科学史と戦争」広重徹

9 後9・30～ 講談＝大谷竹山 漫談芸能史＝永六輔

10 前6 クラシックレコードコンサート

（反博寄席）

その他単の根にうずもれている芸能人を全国から発掘

（討論会）

7～10 後3～5 メインテント（五百人収容）

7 学生運動各派討論会

8 "闘うとは何か" 総評代表、戸村一作、北小路破、小田実

9 大学問題討論会 藤沢道郎（桃山学院）安藤紀興（東大）高橋武智 学生全共闘 佐野章二（桃山学院職員共闘）町田有三（大阪地評青婦部長）

10 "反戦と変革" 小田実、吉川勇一、小中陽太郎、高橋和巳、山田宗睦

11 後1～3 五大政党討論会 各党々首または政策担当者

（べ平連全国会議）

10 後9・30～ メインテント内

参加団体

家永先生の教科書訴訟を支援する市民の会、潮乃会、広島キリスト者平和の会、日中友好委員会、広島べ平連、千葉べ平連、新宮べ平連、北摂べ平連、福岡べ平連、沖縄べ平連、南大阪べ平連、高野雅夫（夜間中学）、金沢べ平連、玉名べ平連、札幌べ平連、このほか参加団体は二百をこえる。十一日のデモには全国の反戦、全学連、全共闘が参加する。反パク成功を呼びかけるアピールが、関西べ平連、関西地区反戦連絡会議、全大阪反戦、京都反戦、河北反戦、北摂反戦、豊能反戦の連名で近日中に発せられる。

（上段写真はハンパク会場となる大阪城公園）

自衛隊に入ろう

1 みなさん方の中に 自衛隊に入りたい人はいませんか ひとはた上げたい人はいませんか 自衛隊じゃ人材もとめてます
※自衛隊に入ろう 入ろう 入ろう 自衛隊に入ればこの世は天国 男の中の 男はみんな 自衛隊に入って 花と散る

2 スポーツをやりたい人いたら いつでも自衛隊におこし下さい ヤリでも鉄砲でも何でもありますよ とにかく体が資本です
※くり返し

3 鉄砲や戦車や飛行機に興味をもっている方は いつでも自衛隊におこし下さい 手とり足とり教えます
※くり返し

4 日本の平和を守るために 鉄砲やロケットがいりますよ アメリカさんにも手伝ってもらい 悪いソ連や中国をやっつけましょう
※くり返し

5 自衛隊じゃ人材もとめてます 年令・学歴は問いません 祖国のためならどこまでも素直な人を求めてます
※くり返し

ハアドリブ〈警棒とヘルメットに身を固め 大きなジュラルミンのタテをもち 学生の頭をポカスカなぐる こんなカッコイイ商売ない 機動隊に入ろう 入ろう 入ろう 機動隊に入ればこの世は天国 男の中の男はみんな 機動隊に入って花と散る

〝三里塚に空港作れぬ〟

国際空港建設反対　淡路島で戸村氏講演

淡路島に新国際空港を作ろうという自民党と関西財界の動きに対して、地元では反対運動がおこっているが、二十日淡路島北淡町の育波公民館で、三里塚芝山連合空港反対同盟の委員長戸村一作氏を招いて、講演と「三里塚の夏」の映画会がおこなわれた。この集会は、総評淡路地区労と、社会党淡路総支部の共催でおこなわれたもので地元から、多数の農漁民、商工業者、主婦などが参加した。次は戸村氏の講演の録音を編集部で要約したものである。

農民は虫ケラか

三里塚の闘いはここで三時間、五時間話しても語りつくされるものではありませんが、帰するところ淡路の闘いも三里塚の闘いも同じものだと思います。それは場所が違っていても空港を作ろうとしているのが同じ佐藤政府であり、空港建設反対の闘いは同じ佐藤政府に対する闘いだからです。

いまから六年前三里塚の隣の富里に政府は空港を作ることを内定しました。

「日本には羽田の七倍の空港が必要だ。これがないと日本は三流四流の劣等国になってしまうのだから、どうしても作りたい」と、政府は一方的に決めてしまった。

富里は非常に肥沃な土地で、一畔千里平野だ。水害もなければ冷害もなく、雪もふらないみのり豊かな土地だ。農民のなかのレベルは一定しており、貧農はいない。二毛作ができる。こんな気候風土のために、どちらかといえば覇気がなかった。上からのいわれるとおり供出もし、何でも協力してきた。三里塚の農民はいわば自民党の提灯持ちばかりをやってきた農民だった。それがいまではすっかり自民党からはなれ、むしろ役人を逆に回して闘っている。

だからといってわれわれの闘いは、政党政派のための闘いではない。われわれの闘いは農民が生きるための闘いです。農民が生きるためにはどうしても闘わなければならないから闘っている。そこには何の理屈もない。政府にいわせれば国際空港がないと日本は困るからどこをでていけという。しかしわれわれ農民にいわせるならば、生きていくためにどこをでていくことはまかりならんということです。

世の中には「日本が国際的に飛躍するにはどうしても空港が必要だ。おまえたちが頑張るから日本は二流三流国にとまってしまう。お前たちは国賊だ」とくってかかる人がいる。

しかしわれわれはそんなことのために闘っているんじゃない。政府は四十二年六月二十三日に農民に何の相談もなく、内定し、七月七日に閣議決定をした。農民には寝耳に水だ。空港にするから農民にどけと政府はいう。こんなやり方に対して「さあどうぞ待ってました」と素直にいうことをきく馬鹿者がいるだろうか。

三里塚農民にとってこの闘いは生きるための闘いだ。しかし生活権から出発したこの闘いのなかで農民は非常にかわってきた。空港がくればうるさくて住めない。公害がある。空港ができれば住めなくなる。空港に百害あって一利のないものだということはわかっている。しかしそれ以上にわれわれが考えたことは、佐藤自民党政権のやることが農民をまったく馬鹿にし、農民を虫ケラのように扱い、農民を生かして殺さずなま殺しの状態におこうということなのです。彼らは農民に「そんなきたない仕事はやめなさい。空港ができれば、成田に百万都市ができる。農地を空港に提供した人は優先的に、空港の一番いい仕事を職旋してやる」といった。

伊丹空港までは新幹線にのせてつれていく。あるいは料亭へ招待し芸者をあげてご馳走する。そのうちに「青い目の西洋人が成田山にきてどんどんおまいりするようになる。ゴマ札は英語で書かなけりゃならん」「成田の聖洋かんは羽が生えてとぶように売れる」と、尾ひれ端ひれのついた景気のいいうまい話がとびだしてきて、空港建設ムードがかもしだされた。

成田市役所の横に空港建設公団事務所がつくられた。毎日のようにアートペーパーに極彩色の豪華なパンフレットを配る。そこに何をだすかというと、金をもらって逃げだした農民がたてた家がある。きれいな家を建てて、シャンデリアをつけた応接間でソファーの上に腰かけてコーヒーをのんでいる農民の生活がでている。「こんないい生活ができるんだのに、反対して百姓やっている奴らは、最後に強制測量で十月になればみんな警察にしばられてしまうんだぞ」と恫喝をする。

最初二千五百名全部が反対し、空港絶対反対という血誓をしめて反対同盟に結集した。それがこれらの宣伝のなかで脱落者がでた。現在残っているのは三割だ。千六〇ヘクタールの空港敷地内に反対派は一三四戸、一三〇ヘクタールをもっている。これからも脱落者がでることは覚悟している。

戸村一作氏

運輸大臣の話

これらの闘いのなかで農民がどのように変ってきたかというと、「公害騒音から郷土を守れ」「祖先伝来の農地は死んでも守る」というスローガンをずっと張りめぐらした。

空港には一日に十万トンの水が必要だ。それを利根川から引くのだが、政府や県は農業用水、畑地灌漑用だといつわって農民に一反六万円の借金を負わせて、測量をはじめた。空港からは飛行機を洗うたびに洗剤やガソリン、オイルの入った汚水がでる。それが田畑に流れる。すると一反十俵の田からは五俵しかとれなくなる。砂川では井戸水のなかからガソリンがでてくる。SSTでは二十、四方が騒音ですめなくなる。教育は破壊される。学校の防音設備は国でなかなかやらない。羽田空港の近くにある朝日小学校ではとうとう、十五年ぶりに都で施工したという実例がある。

農民は闘いのなかで国際空港とは一体何なのかを考えた。

ある日のこと朝の五時半に成田市の大野屋という旅館の番頭が、ひとりのお客を案内してきた。それは当時の運輸大臣大橋武夫だった。彼は「国際空港は運輸大臣とは関連ないからこれを農民はみとめてほしい」といった。政府は羽田が手狭まだから成田に国際空港が必要だという。私たちは羽田空港へいってみた。そこでわれわれがみたものは、米軍がチャーターした米民間機で一杯だった。彼らが羽田を優先的に使用しているために、滑走路があくまで日本の飛行機は空の上で待たされる。それで手狭まだというのだ。運輸大臣のいうことが嘘か本当か、これでわれわれは判断することができた。

農民はこういう嘘にだまされてはならない。

さらに政府は何故三里塚や富里に眼をつけるのか。他の場所じゃいけないのか。富里では二千五百の農民が県庁におしかけて大ガラスをぶち破り、県知事の頭をぶんなぐってまで反対したために、ここからおいだされて隣の三里塚ににげこんできた。政府が三里塚とか富里という地域に固執するには重大な理由があります。

それは日光から立川・厚木をとおり、大島まで日本を南北に縦断するブルー14というアメリカの専用航空路があります。この空路を日本の飛行機はアメリカの許可がないかぎり、横切ることはできません。だから羽田空港から関西にいく旅客機は必ず一度大島まで南下し、そこから機首を北西にむけるという遠回りをしているのです。このブルー14の外にあってしかも東京から近く、海にすぐでられる処が、富里、三里塚地区なのです。ブルー14という空の立入禁止区域は、日米安保条約とそれにもとづく地位協定によってきめられているのです。このことを三里塚農民がつかんだとき、自分たちの生活を守る闘いが安保条約を打破るための闘いだということをつかんだとき、非常に成長しました。

土地をとられて生活できたくなるというのは反対のひとつの理由であるが、それだけの反対運動は条件闘争にかわっていく。

マンモス登記

いまどんな闘いをやっているのか紹介しますと、第一にマンモス登記をしています。各戸は一反歩づつ提供する。そのなかを一坪づつに細分する。その一坪を三百円で社会党の代議士や学校の先生、労働組合員等、北海道から九州までのいろいろな人に買ってもらっている。そしてすぐ登記してしまう。このようなものが空海予定地内に一千八百箇所ある。公団は日本じゅうの一千八百人のところへいって買収交渉をしなければならない。政府はこれに困っていま法律を改悪しようとしているが、一三〇戸プラス一千八百人が反対同盟の勢力になっている。

山のなかには木が沢山生えている。すべての木を一本二百円で立木買売契約を結んでいる。売った木は全部持ち主の名札を下げている。公団は勝手に切り倒すことができない。たとえ土地をかっても、立木の持主が別であれば、その持主の承諾がないかぎり処分できない。このような立木が約三千八百本ある。

さらに反対派の農民は全員「反対同盟に私の土地を一括委任いたします」と、印鑑証明をつけた委任状を反対同盟にだした。

これまでやればわれわれの闘いは勝てるのかといえば、われわれはそうは思っていない。

土地を取り上げられたら食べていけない、騒音・公害で住めなくなる、老人は夜も寝られない、病人は生命を縮める、教育は破壊される、だからなんとか反対しなければいかんということで闘ってきたが、これだけでは勝てないことが闘いのなかでわかってきた。

政府は防音設備をして騒音はなくしてやる、糞ぶきの家よりずっときれいな家を建ててやる、百姓をやれない人々は空港のなかに就職を斡旋してやるという。われわれの闘いが単に利害関係だけの闘いだったら、この政府の甘言の前にころころまいっていったろう。

ある農家が条件派に寝がえりそうだという情報が入るや、各金融機関が競争でワンサとおしかけ、農地を担保に金をかしつける。その貸付額はすでに四億から五億といわれている。政府の狙いは農民の生活をぶっこわすことだ。金をにぎった農民は働くのがいやになってどんどん脱落していく。これと闘って生活を守るかどうかが反対同盟に入るかどうかの別れ道です。

お金をかりた農民の畑は草ぼうぼうです。お金を貸りるとまず入ってくるのが車庫もないところに、デラックスなテレビ付きの外国製乗用車だ。これを乗りまわしてあるく。山のなかに赤青のネオンが輝くキャバレーやバーができる。条件派の農民の間では、俺は昨晩あそこで一万使った、三万使ったということが自慢話になる。それに競輪、競馬。働くのがいやになってしまう。きたない百姓なんかやっているのがバカらしくなってしまう。先日三人の子どもをかかえた条件派の奥さんがガス自殺をはかった。旦那さんは借りた金を全部ふところに入れて妾のところへいってしまい、三カ月も家に帰らない。政府はどうして農民を切りくずし生活を破壊しないと空港はできない。

黄色いバクダン

われわれの闘いは、佐藤自民党政権の最も憎らつな、農民を虫ケラのように牛耳ろうとするそういう国家権力に対する闘いです。国際空港ができなければ日本はおくれてしまうというがそんなことにだまされてはいけない。国際空港ができれば、そこからやがてベトナムの農民を殺すための米軍用機が飛びたつようになる。

運輸大臣は社会党代議士の追及に対して「アメリカとの約束があるから空港の米軍使用の要請を断わるわけにはいかない」とはっきり答弁しています。三里塚空港が軍事基地化される危険はこれではっきりしています。羽田空港が狭くなったからと、米軍の要請によっていま三里塚空港をつくられようとしている。これをわれわれは許していいのだろうか。日本の平和と、第一にマンモス登記をしています。各戸は一反歩づつ提供する。そのなかを一坪づつに細分する。その一坪を三百円で社会党の代議士や学校の先生、労働組合員等、北海道から九州までのいろいろな人に買ってもらっている。そしてすぐ登記してしまう。このようなものが空海予定地内に一千八百箇所ある。公団は日本じゅうの一千八百人のところへいって買収交渉をしなければならない。政府はこれに困っていま法律を改悪しようとしているが、一三〇戸プラス一千八百人が反対同盟の勢力になっている。

山のなかには木が沢山生えている。すべての木を一本二百円で立木買売契約を結んでいる。売った木は全部持ち主の名札を下げている。公団は勝手に切り倒すことができない。たとえ土地をかっても、立木の持主が別であれば、その持主の承諾がないかぎり処分できない。このような立木が約三千八百本ある。

さらに反対派の農民は全員「反対同盟に私の土地を一括委任いたします」と、印鑑証明をつけた委任状を反対同盟にだした。

これまでやればわれわれの闘いは勝てるのかといえば、われわれはそうは思っていない。

土地を取り上げられたら食べていけない、騒音・公害で住めなくなる、老人は夜も寝られない、病人は生命を縮める、教育は破壊される、だからなんとか反対しなければいかんということで闘ってきたが、これだけでは勝てないことが闘いのなかでわかってきた。

政府は防音設備をして騒音はなくしてやる、糞ぶきの家よりずっときれいな家を建ててやる、百姓をやれない人々は空港のなかに就職を斡旋してやるという。われわれの闘いが単に利害関係だけの闘いだったら、この政府の甘言の前にころころまいっていったろう。

ある農家が条件派に寝がえりそうだという情報が入るや、各金融機関が競争でワンサとおしかけ、農地を担保に金をかしつける。その貸付額はすでに四億から五億といわれている。政府の狙いは農民の生活をぶっこわすことだ。金をにぎった農民は働くのがいやになってどんどん脱落していく。これと闘って生活を守るかどうかが反対同盟に入るかどうかの別れ道です。

お金をかりた農民の畑は草ぼうぼうです。お金を貸りるとまず入ってくるのが車庫もないところに、デラックスなテレビ付きの外国製乗用車だ。これを乗りまわしてあるく。山のなかに赤青のネオンが輝くキャバレーやバーができる。条件派の農民の間では、俺は昨晩あそこで一万使った、三万使ったということが自慢話になる。それに競輪、競馬。働くのがいやになってしまう。きたない百姓なんかやっているのがバカらしくなってしまう。先日三人の子どもをかかえた条件派の奥さんがガス自殺をはかった。旦那さんは借りた金を全部ふところに入れて妾のところへいってしまい、三カ月も家に帰らない。政府はどうして農民を切りくずし生活を破壊しないと空港はできない。

黄色いバクダン

われわれの闘いは、佐藤自民党政権の最も憎らつな、農民を虫ケラのように牛耳ろうとするそういう国家権力に対する闘いです。国際空港ができなければ日本はおくれてしまうというがそんなことにだまされてはいけない。国際空港ができれば、そこからやがてベトナムの農民を殺すための米軍用機が飛びたつようになる。

運輸大臣は社会党代議士の追及に対して「アメリカとの約束があるから空港の米軍使用の要請を断わるわけにはいかない」とはっきり答弁しています。三里塚空港が軍事基地化される危険はこれではっきりしています。羽田空港が狭くなったからと、米軍の要請によっていま三里塚空港をつくられようとしている。これをわれわれは許していいのだろうか。日本の平和の死活を決する、日本の戦争反対をつらぬけるかどうかが、三里塚農民の闘いなんです。

八百名の反対派の農民はいま生命をかけて闘っています。子供までが少年行動隊を作った。ある殷階になったら子供は同盟休校させ、同盟の掌握下におくことを考えています。六十才以上の老人によって老人決死隊を作っている。曾沢一利隊長はこういっている。「私は七十八才だ。片足を棺桶の中へ突込んでいる。息子や嫁が血を流して闘っているのに、俺は孫の守りをして鼻水を流していられるか」この老人は三千町歩の山林を持ち、六町歩の田畑を持っている。こういう裕福な農民の老人が決死隊長となり、ブルドーザーがきたらまっさきにその前にとびこんでいく。

あるとき私服警官にとりまかれて条件派の土地を公団職員が測量していた。曾沢老人は十八ℓ入りの石油かんのなかに黄色い糞尿を入れて柄杓で彼らにふりかけた。黄色いものが私服警官や機動隊に見事に命中した。警官は警棒で老人を滅多打ちにした。老人は手錠をかけられ千葉県警本部につれていかれた。

そこで老人は何といったか。「俺は警察の飯は絶対くわない。絶対歩否だ。弁護士もいらない。俺は助かりたくないんだ。農民や全学連、反戦の若いものがこの留置所に入れられないように、われわれ老人をもってことを白状するんだ」機動隊長が何故こんな老いぼれをつかまえたんだと大目玉をくらって、その晩九時半に老人はわれわれの手にかえってきた。

警察の弾圧は残酷だ。私は昨年の二月二十六日に、八名の機動隊にとりまかれ無抵抗のなかで警棒で滅多打ちにされた。私は逮捕された。ところが頭が血がでて着物が真赤に染まった。道に血がポタポタおちた。すると「逮捕」といって私の腕をがっちりつかんでいた警官は手をはなし、とっとと逃げていってしまった。血をみたらすぐ応急処置をして救急車を呼ぶべきではないのか。これが国民の生命と財産をまもるべき警官が実際にやることだ。反対同盟は警官の暴行、逮捕を恐れない。国家権力の弾圧がこわくては闘争に勝つことはできません。

一億でも売らぬ

われわれは単に警察と闘うだけでなく、いろいろな闘いが必要だ。機動隊と闘っていればいいのではなく、機動隊をあやつっている政府権力、独占資本主義体制、独占資本と妥着した自民党政府、そうして農民を虫ケラのように追いだそうとしている支配権力と、われわれは闘わなければなりません。

この観点に到達しなければどんなに闘っても闘いはつよくなりません。やがて条件闘争のなかに埋没してしまいます。請願求貫徹、物とり闘争になってしまいます。私たちはそんな闘いはしません。私は議会闘争、院内闘争を否定しない。しかしわれわれが血みどろに闘っているからこそ、議会闘争ができるんです。

三里塚の農民は「ベトナムの農民を殺すような飛行機をとばす空港は絶対作らせないぞ」といっている。われわれの闘いは単なる利害関係とか、自民党をぶったおすなどというちっぽけな闘いではない。われわれは残虐な国家権力に対してあくなき闘いを追求する。三里塚の農民は、三里塚からおいだされていま隣置運動をしている、静岡県の小笠に国際空港ができるなら小笠にまでおいかけていってたたきつぶすといっています。われわれの闘争は徹底してラヂカルな、本当に人間の自己変革、自己否定の闘いです。三里塚の農民は三年の間にいつもお上のいうことをきく従順な農民から、すっかり変ってしまった。絶対に権力に対して屈服しない農民に成長した。

たとえ条件闘争をやるにしてもハンコをついたらおしまいです。公団は居丈高になって条件をどんどん下げてくる。だから条件闘争をやっても、最後までハンコを押さなけりゃいい。どんどん条件をあげてきます。いくら最後まで頑張っても損はありません。口で追いだされることはありません。

砂川では十四年前三千戸が空港拡張絶対反対で立上った。いまは二十三戸になっている。十四年間闘いぬき、とうとう基地拡張を阻止した。十三年前土地を売った人は安い値段で手放したため、いま家だけはたてたが金はなくなり、東京へ腰弁当下げて労働者になって通っている。もし残った人たちが売ったとすれば、副行動隊長の宮岡さんの土地は一億五千万円になるといわれている。それでもなぜ売らないかは金銭の問題ではない。人間性の問題だ。日本に安保条約がある以上、労働者も、農民も、市民も、学生も、中小商工業者も、決して平和な生活になれないことを知っているから、砂川の農民は土地を売らない。

これは淡路でも同じだ。自民党政権が淡路に国際空港を作ろうとするのも、三里塚に作ろうとするのも、砂川の米軍基地を拡張しようとするのも、魂胆は同じだ。日本の独占資本は帝国主義を復活させ、東南アジア侵略の準備を着々とすすめている。三里塚をその基地にしようとしている。国際空港などという名前で世間をゴマかそうとしているが、中味はまるでちがう。

殺すほか手がない

政府はこの目的のために働くことに喜びを感じていた農民を、労働をきらうように仕向けている。遊ぶことをおぼえさせて、土地から追いだそうとしている。そして農民からただのように土地を取り上げる。その土地を三菱のような大独占が手に入れて大もうけをする。

農民は土地をもっているからこそ、自動車もトラクターも手に入れることができるが、いったん土地を手放してしまえば、銀行は鼻も引っかけてくれません。

いま日中（正統）の人たちが三大農民になりきって畠をたがやしながら、動揺している条件派農民の心のささえとなって活動しています。全学連の学生は毎日小屋にとまりこみ見張をつづけています。警官や公団職員をみつけると下ラムカンを叩きサイレンが鳴ります。農民は田んぼからとるものもとりあえずかけつけてきます。鎌は農民の生活必需品です。警官のピストルとはわけがちがいます。こんなことがくりかえされる毎日です。

このなかで農民が求めているものは、だれもが食べられる社会、一人の抑圧者もない社会、そのような共同社会です。われわれの生活が破壊されてしまえば空港は作られてしまうでしょう。われわれがくえる農民でいるかぎり、空港はできません。四千名の暴走路のなかにたった一人でも絶対にうらないとがんばる農民がいる限り、空港はできないのです。

いまでは心理作戦をやっている。大阪あたりから遠い親戚、知人が突然高価なみやげ物を下げて訪ねてくる。そして「もう反対はやめなさい」と説得される。こんな卑劣な方法をとってくる。三里塚の農民は「何億円つまれても土地は売らない。強制収用されても立退かない。おれたちを殺す以外に空港を作る方法はない」といっています。しかしいまの佐藤政府が、三里塚の反対同盟をみな殺しにしてしまえば、自分たちの生命とりになってしまうことを知っていますから、われわれががんばっているかぎり、空港は三里塚にできません。

月へ逃げ出した米帝

アポロが示す敗北と退廃の「科学」

七月二十一日、アポロ11号が月に着陸し、"人類の代表"と称するアメリカ人が、月面に星条旗を立てた。

ニクソンは欣喜して月へ電話をかけ、二十四日にはハワイ沖まで飛び、その"代表"を出迎えた。

一九五七年十月四日、ソ連のスプートニクがはじめて宇宙を飛んだとき、アメリカ帝国主義の受けた衝撃は深刻だった。

アメリカ帝国主義の威信を回復し、「米国が、科学と力の分野での指導的な地位と優越性をはっきり全世界に誇示するため」には、「最も劇的な措置」で対抗することが必要であった。そのために考えられたのが、「宇宙探険者を月に着陸させ、無事に地球に回収する」（ソレンセン元ケネディ特別補佐官―朝日新聞7・17）"アポロ計画"であり、一九六一年五月ケネディの特別教書で提起された。

それ以来八年、二四〇億ドルのカネと二十五万人もの人材が産・学・軍の共同のもとに集中され、アメリカの国際的威信の名のもとに「計画」は進められた。

そして、ベトナムにおいてすでに海に蹴落されようとしているアメリカ帝国主義の「威信」をかけた"旗手"が、月へ送られたのだ。

四〇％以上ものアメリカ国内の反対も無視し、黒人たちの血の叫びをふりすてて、それは強行された。「全人類の代表」（銘板の碑文）という名を僭称して。

「人類史上画期的な壮挙」（佐藤のメッセージ）という論調がハバをきかしている。

共産党までが同じようは「人類が文字どおりはじめて地球以外の天体に第一歩をしるした画期的なできごと」（赤旗7・23）とたたえている。

しかし、すでに明らかにしたごとく、アポロの目的は"人類"の名をかたる帝国主義の「威信」のためであり、「国威高揚」の名のもとでの、人民への収奪と犠牲の一層の強化であり、二四〇億ドルものカネの、独占によるわけどりである。

あくことない「人民からの収奪」と独占による「分配」が、いつも追求されているのだ。それをごまかすために、"全人類"とか"国"のためにというベールが着せられるのだ。

「アポロ」しかり、「万国博」しかりである。そしてベトナムでは、ベトナム人民、アメリカ人民ともに帝国主義によって殺されており、そのカゲで"死の商人"はぶくぶくとふくれあがっているのだ。

「二十世紀における科学技術の……大きな成果」（赤旗7・23）との論もでている。

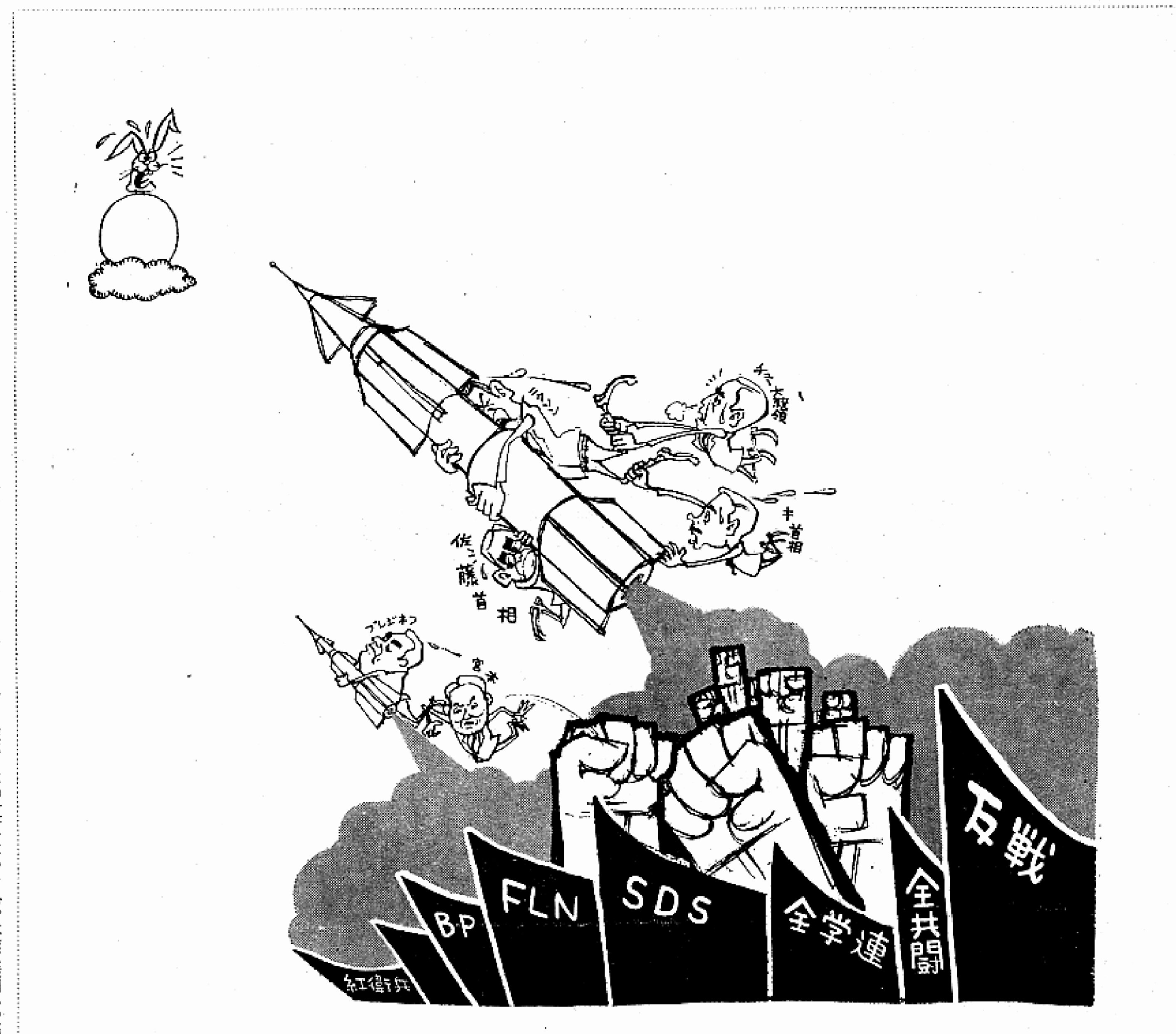
現代の激烈な階級対立の時代にそれから超越した「科学」なるものが存在するのか。

かつて資本主義の初期に、その発展のためにブルジョアジーの手によって開発された「科学」は、資本主義体制確立のために、大きな力を発揮した。

現在、資本主義は帝国主義段階へと突入し、爛熟から頽廃、没落へと社会主義国出現によりますますその歩が早まるとともに「科学」は、資本の必死のあがきを反映し、「体制維持」のためのあくことのあい搾取の強化―最大限利潤の追求、他民族の抑圧―侵略戦争、社会主義国への挑発のための具として、いよいよみがきをかけられた。

ベトナムでの惨虐をみよ。ナパーム、毒ガス、細菌兵器、枯葉作戦……。

沖縄にもちこまれた致死性GB毒ガスがアウシュビッツで何に使われたか、思いだしてみるがよい。



助けてくれ！

広島、長崎に投下された「原子爆弾」が、さらに"改良"され「水素爆弾」として、前線基地沖縄に配置されているのだ。

そして、ジェット爆撃機の巨大化が航空基地の拡張を要求し、農民の土地を取り上げてゆく。

労働者はあいつぐ"設備更新"合理化にしめあげられ、搾りつくされている。

公害はますますひどくなり、人びとを死に追いこんでいる。

"催涙"と称する毒ガスをはじめとする弾圧兵器は、労働者、学生の闘いにおそいかかっている。

いまやこの「科学」の成果は、働く人民の職をうばい、土地を収奪し、搾取を強化徹底し、侵略し虐殺をくりかえしているのだ。帝国主義者の"武器"として。

このことは、「科学技術の偉大な達成を不当にも侵略戦争や独占資本の人民収奪のために動員している帝国主義」は「まさに科学を冒涜」（赤旗7・23）しているのではなく、帝国主義ににぎられた「科学」は、プロレタリアートや被抑圧民族の敵対物としてしか開発されていないのだ。

「ロケットの陰で、この町でも黒人の子が栄養失調で死んでいる」とアポロ打上げの日、宇宙センターへデモをおこなった黒人牧師アバーナシー師は演説している。

しかし帝国主義には、この問題を解決する「科学」はすでにないのだ。

あるのは、搾取と侵略と抑圧の「科学」であり、「白ブタ（白人のこと）どもめ。ブラック・パワーの革命がこわくなったので、ほかに住む場所を捜して逃げ出す準備を始めたんだ」（黒人青年の声―朝日新聞7・22）といわれる「科学」しかないのだ。

「人類の進歩と平和、生活向上のためにこそ利用すべき」（赤旗7・23）「科学」は、帝国主義には存在しないのだ。

東大闘争が明らかにしたのは、このことである。

「……既成のあらゆる領域の研究は、その存立基盤に対する盲目性によって痛烈な断罪を加えられているのだ。……自らをあたかも社会に対して第三者的・外在的な存在であると自己規定し、『科学技術そのものは』という形で技術の普遍性（超階級性）を語ることによって、論理抜きの『"科学・技術の洗練"＝"進歩"はとにかく良いことなのだ』という神話的価値づけがなされる。……工学（技術学）において端的にみられるように、『社会の要請』と『学問の確立』という美名のもとに、実は資本と国家権力の要請にしたがって大学は現実の社会における個別各専門分野の研究調査過程に介入していくのだが、それによって大学は、現実の政治過程を端的に担うことになるのだし、定められた枠の中での一定の技術的成果と引換えに科学技術の根本を問い返す自らの主体側を売り渡すのである。

……いわゆる『研究の自由』なるものはこのような『研究者』の没主体性と引換えに官許のものとして与えられたものにしか過ぎないのだ。……★全ての『研究者』はただちに日常的研究活動をボイコットせよ！ そして自己の全存在全活動に根底的な批判の目を向けよ！ ★自らの不当な存立基盤を自らの手で葬り去れ！」（全学の大学院生・研究生・"研究者"へのアピール『研究者にとって東大闘争とは?』―68・10立看板）

このするどい問題提起に対して共産党が「大学の自治」「学問の自由」を守れとの名のもとに、体制維持をねがい全共闘におそいかかり、その反革命性を自らバクロしているのは当然である。

「アポロ」は帝国主義の強さを表わしてはいない。

反対に、ああゆう、彼ら自身にとっても、その価値がうんぬんされるような状態「月旅行」という形でしか「威信」をしめせないほど退廃しているのだ。

かかる「最高の科学」でさえ、ベトナム人民の「闘争の科学」にはかてないではないか。独占資本の奴僕となり、人民に敵対する「科学」がどんなに「人類の英知」を結集しようとも、人民の英知にまさることはできないことを、アポロはまさに実証してみせたのではないだろうか。「闘争の科学」は「科学技術の進歩」に対して、盲目的な崇拝に堕落したものとともに、「体制擁護の科学」を宇宙の彼方に抛り投げるであろう。全人類に奉仕する科学は、「闘争の科学」の勝利の延長線上によってのみ語ることができよう。

イタリア語の飜訳者求む

イタリアの文献が多数入っています。連絡は新左翼社まで。

電話　三七一―五三〇四

（一面よりつづく）

八月七日は、月遅れの七夕。美術の好きな連中が、笹にもビールを吊るして楽しんでいます。夜九時になると、花火が打ち上げられます。もちろん、絵画展もやります。池永慶一、水谷勇夫といった現代美術の先端をゆく人も参加します。

もう、まっ暗になった会場のあちこちで、沖縄、ベトナム安保を熱っぽく語る人々の輪ができ、それはいつ終るかわかりません。

再び朝がやってきて、全国から集まった高校生のフォークキャンプが開かれ、高石友也村、岡林信康村、そして、あなたの村が全て「解フォーク村」を名乗って、好きな歌を歌い、部落差別を論じ、高校生としての悩みを語りあうわけです。その夜は、ハンパク・フォーク・イン・ナイト。飛び入り大歓迎のフォークコンサートです。新しい曲を歌って、みんなに成果を問う人もいます。また、ハンパク・ダウン・ビート・ビートというジャズを中心にしたコンサートも持たれ、ゴーゴーに狂ずる人もでてきます。腹の出た小田実氏もゴーゴーを踊っているかもしれません。

ハンパクには、さまざまな人が参加します。アンチ万博狂闘会議と称するゼロ次元のグループは、大の男が真裸になって、怪しげにして陰ランなる儀式を「重々しく」とりおこない、八ケ岳山麓を根城にした和製ヒッピーのグループ、部族、かみなり赤からす族、その他、ハンパクに全国から動員された「闘うヒッピー」は、「自然に帰れ」と叫び、各大学全共闘はデモの練習を、そしてアジ演説を、走ることの好きなグループはマラソン大会を、ソフトボール大会を、その他、もうそれこそ種々雑多、無茶苦茶な混乱状態、まさに、現実そのものを、ハンパクの会場に寄せ集めてみました。

そして、八月十一日。全ての催しは終わり、全ての人々、つまりは、オートバイに乗って芝居をやっていた人も、それを追いかけて見ていた人も、映画を上映した人も、絵を描いた人も、裏方としてテントの設営、新式トイレの発明をした人も、アクビをこらえつつハンパク市民大学の講義を聞いていた人も、また、そこでしゃべった人も、歌を歌った人も、ともかく、全ての人々が、大阪城公園に大きな広場を、解放された広場を、平和と解放のための実像を作り上げた人々が、御堂筋に向けて出発します。「反戦・反安保のための御堂筋新型式十万人デモ」がそこに展開されるのです。

腕力に自信ある人は、「強い者組」。歌いたい人は、「フォーク・デモ組」。あいにくハイ・ヒールの靴をはいてきた人は、「女性花束デモ組」。絵に自信のある人は、「プラカード・デモ組」。音痴だが、声の大きさには自信ありという人の「シュプレヒコールデモ組」。そして、「連帯を求めて孤立を恐れず」という人の「市民呼びこみデモ組」。以上のテイ団に分けた機能別デモンストレーションが、「御堂筋を反戦の広場に」を合い言葉に力強く出発するのです。

六九年、われわれによって打ち樹てられた「平和と解放のための実像」は、それが実像であるがゆえに、力強い反戦・反安保の闘いを進めるのです。

ハンパクまで、あとわずか。大阪の地で生まれたハンパクの運動は今や、ベトナム、キューバ、アメリカの人民をも巻きこんだ全世界的規模で取りくまれるまでに発展しました。

無数の人民の、人民による、人民のための万国博、本モノの万国博、それがハンパクであり、そのため、資金も全てカンパでまかなわれます。そして、参加する全ての人がハンパクの主催者です。

さあ、あなたも、主催者になりませんか？

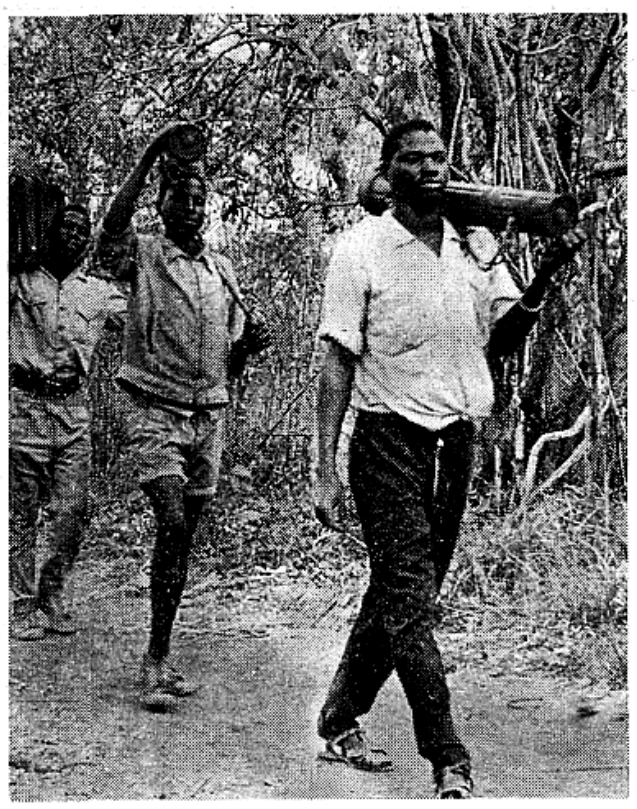
（ハンパク協会事務局植野芳雄）

9月7日30人からなる敵兵の一隊がビラカブラルを出発した。ルルカ村の逃亡者たちを捕えるために派遣されたのである。われわれゲリラ隊はそのしらせをうけて待伏せることにした。敵兵は12人死亡し、多数が負傷した。われわれの同志のうち1人が死亡した。

これはモザンビーク解放戦線―FRELIMO＝フレリモ―のコミュニケの一節である。ポルトガルに対する戦闘で、彼らは1964年以来着実に成果をあげている。

南アフリカの武装闘争

モザンビーク解放戦線



【写真説明】⑮ゲリラ隊へ武器弾薬を運ぶ輸送隊

（一）

ポルトガルは過去四五〇年間にわたってモザンビークを支配してきたと主張しているが、実際にポルトガルの支配におかれたのは一八九〇年以後である。ポルトガルの植民地支配はこの時期から始まった。彼らは〝開発の為〟という名目で、広大な土地を私企業に引渡し、海岸へ生産物を運ぶために無数の道路と鉄道をつくった。移民政策は成功せず、十万人の白人は総人口の二%をしめるにすぎない。

モザンビークの成年男子は誰でも強制的な「契約」労働から免れることはできない。狩り集められた労働者はモザンビーク内で働かされるか、さもなければ南アフリカ共和国かローデシアに送られた。余剰労働力の輸出は植民地政府の貴重な収入源で、一人につき六〝ポンド〟を金でうけとるのである。

モザンビークの人たちはもう何年も前から、ポルトガルの支配を逃れて、タンザニア、マラウイ、ザンビアなどの隣国へいった。今日ではこれらの逃亡者たちがモザンビーク解放戦線（FRELIMO＝フレリモ）の背後にいて、新しい戦闘員を提供している。フレリモの本部はいまダルエスサラームにある。

モザンビークには就学人口が二五十万もいるのに、実際に入学しているアフリカ人の生徒は五百人にすぎなかった。モザンビークには政党も労働組合もなく、わずかの協同組合があるだけだった。アフリカ人のブルジョアジーは無に等しく、小さな貿易商人や商店経営者までアジア人かポルトガル人だった。ポルトガルがゲリラに対抗するために動員できる、ブルジョアもプチブルもアフリカ人のなかにいなかった。白人の移住者でさえ、小数ではあるが、融通のきかないサラザール政権の下では、どんな政治勢力も支持していなかった。またポルトガル軍のなかにいるモザンビークの兵士たちはだんだん「信頼できない」とみなされ、活動地域からしりぞけられてしまった。

（二）

戦闘はフレリモによって綿密に準備され、一九六四年九月二十五日に始まった。

フレリモは一九六二年九月に八十人の代表と五百人のオブザーバーが参加して結成され、エドアルド・モンドレイン博士が委員長に選ばれた。会議で決定された組織の目的は漠然としていた。中央委員会に対する指令は次のような内容であった。①幹部将校の訓練を促進させること②モザンビークの自由を促進するためにあらゆる努力をすること③あらゆる可能な場所に学校をたて文盲の廃絶を促進すること④商業組合と学生・婦人の組織化を奨励し支持すること。

ゲリラ戦をやるということさえ直接のべられておらず、委員会は単に次のように指示されただけだった。「自己防衛のためのあらゆる手段を調達し、人びとをしてあらゆる不慮の事件にそなえさせること」

この段階では会議の代表団たちの間にさえ、自分たちの闘争が世界中の解放運動の一部だという確固たる意識がなかった。「モザンビークにおける自由のために、外交的、道徳的、物質的援助を、とくにアフリカの独立国から、また自由と平和を愛する世界じゅうのあらゆる国々から求めること」という決議はあったが、しかし世界革命の意識についての叙述はなかった。一九六二年にはまだ社会主義意識も欠除していた。

一九六二―四年は準備期間だった。

この間に訓練基地がタンザニアに設置され、資金が諸外国からあつめられ、学生を外国に送って教育し、ダルエスサラームに初級と中級の学校がたてられた。更に幹部将校の形成と並んで、村民とゲリラ隊員との接触のための下工作と政策的な準備が進められた。

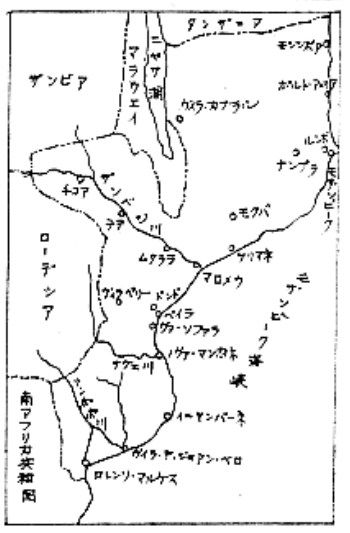
一九六四年にフレリモの部隊は初めてタンザニアからモザンビークの最北端カボデルガドとニアサに浸透していった。ゲリラの戦術は最初から実に正確だった。まず第一に戦術を待伏せ攻撃に限定した。そして時どきポルトガル軍へヒット・エンド・ランの襲撃をかけた。戦闘が終ると安全に敵のなかにもぐり込むことができた。

ポルトガル軍は村落や畑、ゲリラ隊がいるとおぼしきところなどを飛行機からの爆撃で報復した。この爆撃で最も苦しんだのは非武装の農民たちだったので、農民と植民地主義者との対立は激しくなった。

軍事行動が南へ拡がるにつれて解放区は広がり、現在解放区と半解放区ふくめておよそ七万五千平方マイル、八十万人の人口をかかえている。

解放された土地は食料生産のために再分配された。いくつかの生産者協同組合も再建され、一九六六年には少量の種子と堅果が輸出された。医療の面では診療所がいくつか建てられることになっており、四百名の医師助手が訓練をうけている。解放区では一万人の児童が小学校へかよっている。

六八年の六月にニザヤ地区で会議がひらかれ、フレリモの中央機関が再選された。この会議にはすべての代表団が参加し、重要な問題が討論された。



（三）

モザンビーク革命は、いま人民の日常的な生活管理をもふくめて解放区における再建という第三の段階に入った。

レジス・ドブレはキューバでの経験から、ゲリラがどのようにして人民の軍隊に変ったのかを分析している。モザンビークの場合はいくつかの重要な点でキューバとは異なっている。第一にそれは民族解放戦争であって階級闘争ではない、ということである。ポルトガルが民族ブルジョアジーの形成を妨げてきた結果、農民の主張と民族ブルジョアジーの主張が一致し、ゲリラの仕事はやりやすかった。

ラテンアメリカの場合には、ゲリラ活動に先行する政治組織はいらないというドブレの主張は正しい。しかしモザンビークでは、ゲリラがある地区に入る以前に、その地区に連絡をつけておくことは可能だし、その方が有意義でもある。私はモンドレイン氏にこの違いをどう評価するかたずねてみた。彼は二点を指摘した。第一はモザンビークの闘争が民族解放戦争であって、モザンビークの村民はなぜ自分たちが苦しんでいるかということを、ボリビアやコロンビアの農民よりもよく知っているということである。第二は、ポルトガル政府が民衆とほとんど接触をもっていないので、密告者があまりいないということである。

こうしてフレリモは最初から、正規のゲリラ軍や装備され訓練された地方の民兵を組織すると同時に、地方の行政機構を設立していった。しかしモザンビークではドブレの分析が基本的にあてはまらないというのではない。なぜならゲリラ活動の成否は最終的には、人民を全体として巻きこむかどうかにかかっているからである。国外から供給されるゲリラと、見物人の役を演ずる、農民との間が明確に区分されているようなところでは、成功するはずがない。

植民地政府が撤退したあとの真空状態をうづめるために、フレリモは自らを政治勢力として確立しつつある。まず第一に自分自身の事柄を、自分自身のためになるよう組織するという訓練をとおして政治教育をおこない、とくに闘争に積極的に参加することを通じて大衆は自己の革命的役割を初めて知るのであり、そのことによって革命のイメージを自分で画いていくのである。ドブレの言葉を借りるならば、ゲリラという小さなモーターが大きなモーターを動かしてきた、ということなのである。

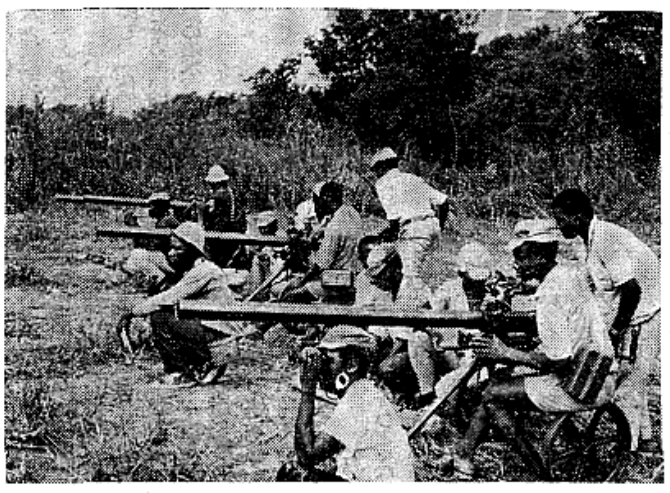
（四）

フレリモは次第に国際帝国主義グループは内部抗争で分裂する傾向にあり、フレリモもいままで独自で前進することができたので、こうしたグループと密接な関係をもつことの必要性をあまり感じていなかった。

アフリカ統一機構解放委員会は運動を結びつけてはいるが、植民地主義者と南アフリカ共和国軍と合同したときに活躍しただけだった。南アフリカ共和国の憲兵隊はすでにローデシアでZAPUに対して活動しており、その部隊はザンベチ防衛のためにモザンビクに駐留している。さらに南ア共和国の専門家はポルトガル軍の訓練にあたっている。南アフリカ共和国は革命組織がますます活動領域をひろげていく事実に直面して、早急に公然と反応を示さざるをえなくなっている。南アフリカ共和国の反応は防衛的なものではなく、ザンビアとタンザニアに対する攻撃的なものになるであろう。解放運動に同情的なこの二つの政府が消滅するということは、たしかに南部アフリカ全体の解放運動にとって、かなりの打撃である。

このような新たな事態の発展によって、民族主義運動が南アフリカファシズムに対する統一戦線にみちびくかどうか、結論をだすには早すぎる。しかし南部アフリカの数百万人の未来が、モザンビークにおけるフレリモの成功にかかっていることは明らかである。

（「マンスリー・レビュー」一九六八年十二月号、グリン・フーズ〝フレリモとモザンビーク解放戦争〟から要約。筆者はタンザニアのダル・エス・サラームにある聖ランドルフ大学で教鞭をとっている）宗像幸子訳



武器の使用法を学ぶ解放戦士

【写真説明】訓練にはげむゲリラ隊員

前進するアラブ人民のたたかい
米帝国主義の道具イスラエル
アジア・アフリカ人民連帯日本委員会編
定価　一〇〇円　送料　三五円
アジア・アフリカ人民連帯日本委員会発行
東京都千代田区神田司町二―五市村ビル　電話二九一―二二一　振替東京一八六〇九
アジア・アフリカ人民連帯日本委員会大阪府本部
大阪市北区伊勢町三四　日清ビル四階　日中友好協会（正統）大阪府本部内　電話三六三―〇八四一～二